

遣唐使ゆかりの地を訪ねて

城下町としての名残をとどめる五島市は、かつて海を渡って大陸を目指した遣唐使ゆかりの地としても知られている。遣唐使は、六三〇年から約二百六十年間、十八回にわたって学者や僧、留学生を派遣した大企業。後期には筑紫の大津(博多)から平戸、五島、揚子江への南路がとられたという。

岐宿町に入り、遣唐使船日本最後の寄港地である魚津ヶ崎公園、さらに食糧補給や風待ちのために船のとも綱を結んで待機した白石のともづな石を訪ねたあと、三井楽町の柏崎公園まで足を伸ばした。

車を降りると、目の前は紺碧の海。右に姫島、左に嵯峨ノ島がぼっかりと浮かんでいた。

小高い丘には「辞本涯」と刻まれた石碑が建つ。八〇四年の第十六次遣唐使船で唐に渡った弘法大師空海と柏崎のかかわりを知った人々が、空海の遺徳を顕彰し、広く世に紹介しようと建立したものである。

「辞本涯」とは、空海の書から引用した言葉といわれており、「日本のさいはての地を去る」との意味を持つ。この言葉からも、いかに渡唐が永遠の別れをも覚悟した過酷な旅だったのかが容易に想像できる。

順風が吹き、ここから船出した四隻の遣唐使船。そこに乗り込んだ五百人以上の人々は、今生の見納めになるかもと美しい海や島影をしっかりと心に焼き付け、祈るような気持ちで東シナ海にくり出していったのだろう。

魚津ヶ崎公園 | 白石のともづな石
白良ヶ浜万葉公園



柏崎の丘に建つ歌碑には次のような歌が刻まれている。

旅人の 宿りせむ野に 霜降らば
我が子羽ぐくめ 天の鶴群

(旅をする人が野宿する野に霜がおりたら、私の息子をその羽で守ってあげて、空を飛ぶ鶴たちよ) 異国へと旅立つわが子を思う母親の切ない気持ちが伝わってくる。

遣唐使の守護にあった人物を祀っている岩獄神社、遣唐使船の飲料水、船舶用水として利用されたという大井戸のふぜん河、遣唐使に関する資料を展示している遣唐使ふるさと館に立ち寄ったあと、玉之浦町の大宝寺に向かった。

大宝寺は、約千三百年前に建てられた由緒あるお寺である。八〇六年、唐から帰国した空海が立ち寄り、布教活動をした真言宗最初の道場で、「西の高野山」とも呼ばれている。本殿には、共に唐へ渡った最澄が寄進した仏像や、江戸宝暦時の十二支の絵、左甚五郎の作といわれる彫刻などがあり、境内には六百年以上の歴史がある梵鐘(県指定文化財)が残されている。



上/岩獄神社の鳥居
下/大井戸のふぜん河



上/県指定文化財の梵鐘
右/大宝寺の本堂

